

## 「ため池の水位調節によるブルーギルコロニーの崩壊」

北島淳也(滋賀タナゴネット・岐阜大)・森誠一(岐阜経済大)

農業用のため池は希少淡水魚が生息するなど、生物多様性保全の上から重要な場所となっている。しかし、農業の変化による利用の低下がため池に社会的環境の変化をもたらし、埋め立てや消失、改修、管理の停止、不徹底なビオトープなど、ため池の生物多様性保全の上で様々な問題が起こっている。中でも、ブラックバスやブルーギルなどの外来魚の移入は、ため池の



在来水生生物に決定的な影響を与えるとされ、各地で駆除が試みられている。演者らはこの間、ブルーギルの駆除や繁殖の抑制を目的に調査を行ってきたが、農業用ため池のブルーギルは、ほとんどが岸近く（岸から4メートル以内）の浅い場所（水深60cm以下）に産卵床を形成していた。そこで、ブルーギル繁殖コロニーへの水位低下の影響を明らかにし、繁殖抑制の為のため池管理方法を検討することを目的に、2002年から個体識別を施したブルーギルを継続的に観察してきた野外の生息地（ため池）及び、周囲を暗幕で覆い、底質に砂利を導入した屋外コンクリート池（実験池）において、コロニー形成中に水位を変化させつつ、行動観察を行ない、ブルーギル繁殖コロニーの水位変化への影響を調査した。

ため池において、水位低下前は、各オーナー雄はほとんど、なわばりから出ず、コロニーは整然としていたが、15cmの水位低下時には、オーナー雄が他の産卵床に進入し、隣接オーナーと激しく争いコロニーは騒然とした状態となった。また、実験池においても、15cmの水位低下によりコロニーは騒然となった。わずかな、水位低下でも、ブルーギルコロニーの秩序を乱し、コロニーを崩壊に導く可能性が考えられた。一方、ため池において農繁期の水抜きはわずか15cmでも、管理者の同意を得る事はたやすくなかった。要請時には、研究の内容の説明とともに、生物多様性の観点から、ふるさとのため池のあり方を提案する事を心がけた。ある自治会では、農業者の方々約10人に集まっていただき、「身近な淡水魚と外来魚」と題した小講演会を行った結果、快く同意をいただくことが出来、それらは池の水を抜いての外来魚駆除において、住民参加の協働作業にも繋がった。ブルーギルの繁殖を抑制するため池管理を行っていく上で、「地域の宝物」として生物多様性の観点からのため池のあり方への提案は、決定的に重要であった。